

いよさか NEWS

vol.16
May 30 2019

●発行:日本ボーイスカウト東京都連盟 日野第2団 ●編集者:中村俊郎 ●住所:東京都日野市程久保4-7-14 ●ホームページ:<https://www.hino2.tokyo/>



すべてのものに始まりがある

西暦30年頃、今から1990年前に現在のイスラエルのエルサレムのある家の二階で「主の晩餐:最後の晩餐」をイエス様は行いました。ミサの始まりです。

イエス様は次の日(金曜日)に十字架にかかり亡くなりました。そして3日後の土曜日の晩に復活されました。復活祭の始まりです。

これは、イエス様は私たちに「神我らと共に」居て下さる。何時も一緒にいて下さる。誰にでも、皆と共に居て下さることを全世界の人々に分かちてもらったためでした。そして、今でもイエス様は私たちと一緒にいて下さいます。

イエス様が共に居て下さると、人々を大切に出来たり、自然を美しいと感じたり、友達とけんかをして

直ぐに仲直りできたり、親切に、感謝の心を持てたりします。

でも私たちは時々イエス様が一緒にいて下さることを忘れてしまいます。学校や社会で嫌なことが有ったりします。そんな時、私たちは思い出します。「疲れた者、重荷を負う者は、わたしのところに来なさい、休ませてあげよう」とイエス様が私たちに語り掛けてくれます。そして、私たちはミサに与り、もう一度力をいただき、元気になって学校に社会に出かけていきます。ミサが週の始まりです。

ボーイスカウト日野第2団も始まりがあります。1970年2月22日です。今、私たちが日野2団で活動しているのも、この誕生日が有るからです。

初代の高幡教会の主任司祭であ

るロワゼール神父様をはじめ、メルセス宣教修道女会のシスターエルビラなどの方々の思いと支援、そしてお祈りによって日野2団は発団しました。この祈りは今でも続いています。私たちは時々この始まりのことを忘れてしまいかちですが、この50周年記念の年に、もう一度皆でこの大きなお恵みを心で感じ、感謝の心を持ってこれからも活動することを今一度心に留めましょう。そして新たな一歩をまた始めましょう。

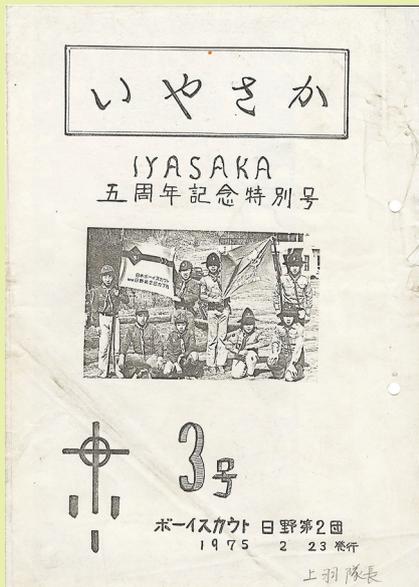
次に、日野2団「5周年記念特別号のいよさか」から先輩たちのメッセージをいただきましょう。

令和元年5月
ボーイスカウト日野2団
団委員長 鈴木英彦

いやさか
5周年記念特別号
復刻版



日野第2団
50周年特別企画



祝 五周年に寄せて
育成会会長 エルピラ・エスケデロ

まだつい先だっつてのように思いますが、カブとボーイの小さいグループで始まった日野第二団は早や第五周年を迎えました。毎週日曜日毎に、緑の丘の上になびく国旗を囲む元気な、成長したスカウトの姿を見る度に、私の心は喜びに満たされます。この進歩は、スカウトのリーダーと、ご父兄の絶えざるご尽力の場です。皆さんが、己を忘れて、各自の時間とエネルギーを子供たちの上に注ぎ、子供たちが、喜びの中に、心身ともに元気になるように、尽くして居られるからです。ここに紙上をかりて、お礼を申し上げます。

最近いろいろマスコミでとりあげられている青少年問題を考える時、このスカウトの運動に彼らに善を勧め、悪をさげさせる上で、素晴らしい働きを持っています。

次に、スカウトの皆さん、あなた方は、スカウト活動が、ただ面白いから集まるというだけでなく、あなた方自身が、社会の中に福音のパン種となつてゆかねばなりません。現代の利己主義の社会、また友達や家庭の中でスカウトの精神を忘れず、自分の利益を求めず、人を助けるよう努力して下さい。もし私たちが、このようにすることが出来たら、皆さんと、そして新しい日本の上に、豊かな神の祝福があることでしょう。

五周年に当って“ひの二だん丸”
ロワゼール

上羽隊長と関戸リーダーが、もうカブスカウト隊の準備に熱心にあずさわっていた頃でした。ある日曜日のミサの後、二人の少年がカブスカウトのゲームをうらやましそにながめているのを見て寄ってみました。

—君たちは、何年生ですか？
—五年生です。
—そうですか。それじゃ、お友達をつれてボーイスカウトの活動をやってみたら。
—うん!!

あれからもう五年たちました。ささやかな出発から、友達から友達に、日野二団の仲間が、十倍ほどふえてきました。やはり「風の子供達」が、自然とはだで触れてやるのが、魅力であった訳でしょう。

たとえて申しますと、この五年の間、はじめの十人乗りの小舟が百二十人乗りの「でかい」船に乗りかえなければならなかったのです。これは楽な仕事ではありません。今になつても、船長たちがどうなるかを心配しつづけます。

けれども、海が静まっても、波のうねりが高くて、船の仲間たちが手を組んでがんばっています。皆さんのおかげで、こういうチームワークを持つて五年もすごして来たことは、誠に感謝すべきことです。ありがとう!!

これから何年も、ぼくらの旅が、仲間をふえながら無事に楽しくつづけることができるのを心よりお祈りする次第です。

いやさか 日野二団丸だよ!!

最初の五周年
水上留次郎

私が最初の五周年記念を迎えたのは、大正14年(1925)4月3日、函館巴廿年団で、団長は中野という印刷所主人、副団長は熊木という小学校の先生、団員は32名で私は15才の学生で、上級班長の役目をしていた。

服装も大部分は、和服に袴(はかま)、学生帽、履物はゴム靴、ぞうり、下駄、わらじ、足袋(たび)などまちまちで、和服の上にバッチと班別章などを付け、長さ5尺(1m50cm)の団杖(だんじょう)を持っていた。リーダーはイギリス騎兵将校の正服でとてもスマートであった。団費は月3銭。

記念式典が終わったら火事があったので出動し、ロープで非常線を張り運び出された家財をまもり奉仕したのも、今はなつかしい思い出である。

恵まれた環境の日野2団の創立5周年、おそらく人生最後の五周年を迎えるにあたり、50年前の五周年を思い出してみました。

五年間をふりかえって
ボーイスカウト隊長 三国谷憲雄

はやいもので、日野二団少年隊も
発隊してから五周年を迎えます。

昨日買ったばかりで生まれて初め
て着る制服に身をつつんで、スカウト
五・六人と隊長が、はずかしそうに、
てれくさそうに、光塩の庭に立ったこ
ろがなつかしく、思い出されます。

あれから五年、今ではスカウト数
四十名以上にもなりました。

キャンプに行くとき、自分より大き
な荷物をせおって、うしろから見ると
ザックに足がついて歩いているよう
に、小さかったスカウトたちも、今で
はリーダーが上を見て話すほどに大
きくなっています。

この間、いろいろな事情で脱線・転
出した立派な少年たちも少なくあり
ません。

テントを張り、楽しい食事、夜は一
面の星空の下で“キャンプファイヤー
”と考えるのは夢のような話。雨や雷
の中での炊事のつらいこと。時にはう
まく火がつかず、生にえのごはんを食
べたり、灰だらけのライスカレー。人
の歩いたことのないような山中を歩
きまわったハイキング、炎天下の野外
作業などつらかったことはいくらでも
思い出されます。

でもスカウトたちはどんなことにも
負けずに、涙をこらえ、歯をくいし
ばってがんばりました。そして反省会

では必ず“たのしかった”となります。
発隊以来五年、決して他の団にく
らべて長いとはいえません。むしろま
だよちよち歩きの赤ん坊の隊です。

でも日野二団少年隊のスカウト達
は、決して長いとはいえ歴史の
間に、素晴らしいものを掴んでくれま
した。

“忍耐”とそして“感謝”する心です。
少年時代にこんな心をつかんだスカ
ウトたち、今後のわが隊の土台を築
いたスカウトたち、そしてその場を想
像し与えてくださった団委員の方々
に心から感謝の気持ちでいっぱい
です。

ベーデンパウエルを忘れまい
カブスカウト隊長 上羽譲一

新しかった団も五年が経った。
新しい団が、スカウト経験の全くない
人達で始まったから、活動の基準は
“ベーデン パウエル”の言葉そのま
まだった。

五年の時間は、貴重だが、時間が
問題ではない。時間が経てば経つほど、
ベーデンパウエルの精神を鮮明に意
識しなくてはいけない。

“何のためのスカウティングか”
規律は何のために、知識は何のため
に、技術は何のために。

この目的が不鮮明になったスカウ

ティングはベーデンパウエルの考え
るスカウティングの真似事“スカウト
ごっこ”でしかない。

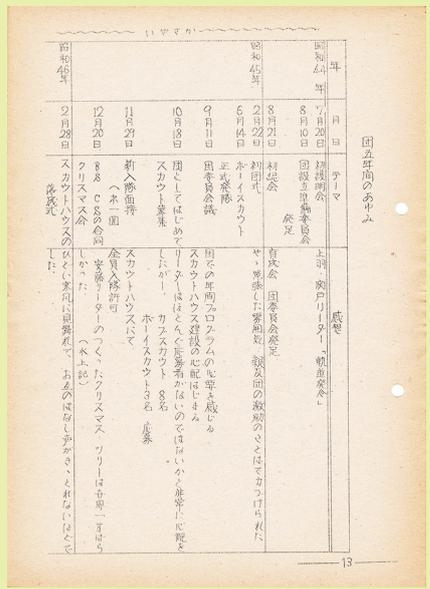
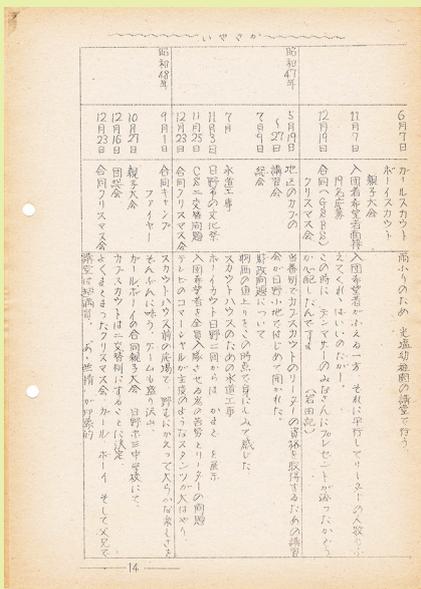
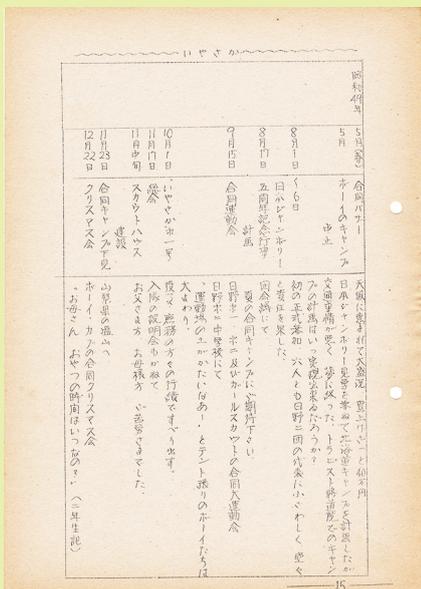
子供の“しあわせ”のために、指導
者はもちろん、家庭がまず“ベーデン
パウエル”の心”を識る必要があろう。
規律のためだけの規律訓練になっ
てはいないか。自分のための知識や技
術の習得を目標にしてはいないか。

ベーデンパウエル卿の“最後の手
紙”の一節を思い出そう。

“幸福になる第一歩は、君達の身
体を、少年の間に健康かつ強壯にす
ることに始まります。そうすれば、君
たちが大人になったとき、お役に立つ
ことができ、それ故に生活をたのしむ
ことができるのです。

けれども、幸福を得る本当の道は、
他の人に幸福を与えることによって
得られるのです。諸君の見出した世
界よりか、多少でもこの世界を良いも
のにしてあとに残すならば、君たちの
死ぬ順番が回って着た時、自分は最
善をつくしたのだから、とにかく時を
むだにしなかったという幸福を感じ
ながら満足して死ぬことができます。

この道に“そなえよつねに”そして
幸福に生き、幸福に死ぬこと。いつも
スカウトのちかいを身につけて、君
達が大人になった後にもそうすれ
ば、君たちのすることを神さまは助け
て下さるのです。



ありがとう ロワゼール神父様



ロワゼール神父様が5月19日（日曜日）さつき祭ミサでお説教している写真です。

私たちに残してくれたメッセージ。「互いに愛し合いなさい、そうすれば活動は続きます」

ヨハネ福音：13章33節 「新しい掟」

子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。「わたしが行くところにあなたがたは来ることができない」とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言うておく。あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。

ロワゼール神父様は6月17日にカナダに帰ります。今しばらく一緒です。「互いに愛し合いなさい。」これは、イエス様のラストメッセージの一つです。



北八ヶ岳
アドベンチャーキャンプ

毎年恒例のベンチャー隊の「北八ヶ岳アドベンチャーキャンプ」が、上進スカウト1名を迎え、2019年3月23日(土)から27日(水)の日程で実施されました。期間中はほぼ毎日晴天に恵まれ、メインプログラムである天狗岳(標高:2646M)にも快晴の青空の下、参加スカウト全員が無事に登頂できました。

毎年春先に実施されるこの訓練キャンプは40年近くの伝統があります。当時は、朝早くに高尾駅を出発し中央本線から小海線と乗り継ぎながら登山口である松原湖駅へ。そこからキャンプでお借りしていた上智大学のソフィアヒュッテまで、個人装備や隊装備・そしてキャンプ中の食糧をリュックに背負い、7時間近く(今は登山基地として利用しているしらび小屋まで約2時間歩けば到着します!)歩いて、夕方近くによくソフィアヒュッテに到着したものでした。そして、登山技術や用具の扱い方は日野2団の兄弟団でもある世田谷9団のスカウトからいろいろと見聞きしながら実施されていたと聞いています。そこで先輩たちが学んだ技術を後輩たちに伝え、後輩スカウトたちは次に上がってくるスカウトたちにその技術を継承してきました。今までこのキャンプに参加した多くのスカウトたちが自然の偉大さを肌で感じ、創造主である神様への尊敬に気持ちを抱き、先輩スカウトから多くの山岳技術を学び、仲間とのチームワークを醸成し、そこでの思い出をいまでも大切にしています。

先日、30年ほど前の写真を整理していたところ、参加スカウトがピークのとときの山頂での記念写真が出てきました。その数なんとスカウト&指導者含めて40名近く!こんなにも多くの参加スカウトが安全に冬季の登山プログラムを事故なく楽しめるように、経験のある10名近い指導者と団委員長さんが参加されていたことを改めて思うと、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

30年を経て、スカウト数も当時に比べると大幅に減少してはいますが、その原点は今も変わらず、先輩スカウトの的確な指導と多くの指導者・団委員の皆様のご支援により、今年もプログラムが遂行できましたことを感謝したいと思います。また現ボーイ隊のスカウト全員がベンチャー隊に上進し、将来多くの先輩たちが体験したこの大自然での厳しくも楽しい5日間を一緒に過ごすことを願ってやみません。

北八ヶ岳に乾杯!

ベンチャー隊長 川原 聡



ベンチャー & ローバー
合同カヌーキャンプ

10連休の後半、5月2日から4日まで多摩川の柚木の川原にてベンチャー隊&ローバー隊で久しぶりのカヌーキャンプを実施しました。当初の計画では平成最後と令和最初の日にちをかヌーをしながら過ごす予定でしたが、悪天候により2日からの実施に延期しました。その結果天候にも恵まれたので、スカウトたちもカヌー技術の習得に力を入れることができたようです。

ボーイ部門までと違い、ベンチャースカウトになると自ら計画したプロジェクトを達成し、野外活動を通して自らの健康の増進をはかり、自己の確立を目指すこと、指導者の援助を得て各種身体的活動に挑戦するという活動目標があります。

今回彼らはカヌーでどこかの川を下ることを最終目標に掲げていますので、その目標に向けて操船技術を更に磨いていきます。今回、その指導役としてローバーから2名のスカウトが参加してくれたので、スカウトたちにとっては先輩たちの指導もいい刺激になったことと思います。

(文責 川原)



吉田蓮さんが「宗教章」を取得

私は宗教章の奉仕活動として、日本にいる難民の支援を行いました。主な内容として、CTICの方に話を聞き、実際にCTICでやっている支援を行うという内容でした。その奉仕活動の中で日本の難民がどのような状況で、どのような問題をかかえているかを知りました。というのも、私は元々工業系の専門学校に行っているため、技能実習制度による問題程度しか外国人の問題に触れることがなかったため、CTICの方のお話は非常に新鮮かつ衝撃的な内容でした。特に記憶に残ったのは、他国と比較した難民申請者に対する難民として認定された人の数でした。あまりの少なさに驚きました。そして難民として認定されていないため不法滞在者とされていると聞き、なんともいえない気分になりました。

これらの経験を通し、難民や不法滞在者に対する考え方が少々変わりました。前までは不法滞在者のことを文字通りにとらえていましたが、そのうちの大多数が難民として認定されてない人々であるということを忘れないようにしたいです。また、他の人々を「助ける」とまではいかないにしても、他の人々を「敵と決めつける」ということをやめるといったことを心がけたいと思いました。多くの難民が難民でないと決めつけられて苦しい状況にあります。少し考え方を考えるだけで救われる人がいるのなら、考え方を柔軟に変えようとも思いました。

※CTIC: Catholic Tokyo International Center (カトリック東京国際センター)



2018年12月9日
ボーイスカウト 日野第2団
ベンチャースカウト隊 吉田蓮



活動

かつどうだより

便り

